

(2) 「課題研究」の取組（第2学年全体）

今年度より第2学年全員履修による「課題研究」を実践するにあたり、昨年度より継続してきた取組及び、実践内容及びその検証について記す。

ア はじめに

【検証のポイント】（初年度報告書より抜粋）

- (ア) 本校生徒は、人前で話す機会が与えられるとある程度適切に話すことができるようになりつつあるが、その内容が本人の深い課題意識をもったものであり、生徒自身が追究したいことに基づいていたものであったかについては、その段階に至っていなかった。
- (イ) 教員が与えたものについては、真面目に取り組む生徒が多いが、自ら課題を見つけて、どのようにすれば良いのかについて、自ら考えて動ける生徒が少ない。自ら課題意識をもち、進路実現に向けて自走できる生徒を育成することにおける検証。
- (ウ) 生徒がすぐに答えを求めそれに飛びつこうとする、安易な目先の答えを求めるのではなく、答えの出ない問いに対して、じっくりと取り組む姿勢を学校全体で育成する体制づくり。

【重点項目】検証のポイントを踏まえ、以下を重点項目とした。

- (ア) グランドデザインに基づいたルーブリックの策定及び共有
- (イ) 年間計画と指導体制づくり（メソッドと目標を共有）
 - ・生徒一人一人が、研究課題を設定
 - ・教員はファシリテーター役
- (ウ) 授業担当者会議の実施
 - ・共通ワークシート
 - ・指導案提示
- (エ) 生徒の変容への注視（『気づきノート』から『研究ノート』へ）
- (オ) 次年度への引継ぎ

イ 実践内容

- (ア) グランドデザインに基づいたルーブリックの策定及び共有

昨年度11月、本校における課題研究の目標について教員全体で共有するため、グランドデザインを策定し、全教員で共有をしている。本校の教育目標に基づき、課題研究を通じて育成したい生徒像を共有するとともに、職員研修の場では、教員の役割について確認をした。教員が内容を指導する形ではなく、生徒の探究活動に「伴走」し、問いかけをしたり、説明を促したりといったいわゆる「ファシリテーター役」になることを目指すということを、議論を重ねながら共通認識を図ってきた。本校における課題研究の特色は、個人研究を基本とし、生徒の主体的な課題設定及び、設定した課題に向き合う「過程」を充実させることにある。その中でキーワードとなった言葉が、「俯瞰力」である。いわゆる「鳥の目」となり、生徒自身が自身を客観的に捉え、自分の実践を振り返るなどしながら、自己のキャリア形成へつなげていけるような、生徒の育成を目指している。このことが「当事者意識」をもった課題研究への取組が深化するものと考えている。

これらを達成するにあたり、資質・能力をベースとした12項目の目標を設定した。各時期・各段階で、生徒と教員の双方が「何を目指して」学んでいくかを表している。いずれの項目も切り離せないものではあり、それぞれが互いに作用しながら、培われていく力であるために、柔軟な評価が必要である。また、評価をするにあたり、生徒の「兆候」を具体的に、詳細については、授業担当者会議等を通じて伝え、運用していくことにした。

今年度に入り共有をしたルーブリックはP.81に掲載している。原案については、課題研

究の運営に当たっている教育企画部10名で何度も練り直し、先進的な取組をされている高等学校や、SSH校で実際に使用されているルーブリック等も参考に、策定をした。これを元に、各学期ごとに生徒の「自己評価シート」を作成、また中間発表会の機会等には「他己評価シート」等を作成し、ルーブリックに沿った一定の指導のルールを敷設することができた。（自己評価シート及び他己評価シートは(P.82-83)に一部掲載）。

(イ) 年間の計画に関わる変更と意義

第2学年「課題研究」の「年間計画」は次の通り。

〈当初の年間計画〉

第1学期 ア) 研究手法 イ) 研究課題の設定 ウ) 研究計画書

夏休み ウ) に基づく検証、FW等の実施

第2学期 エ) 中間発表会

第3学期 オ) レポート作成 カ) 課題研究発表会 キ) 振り返りレポート

※それぞれ学期ごとに「自己評価」を実施、エ) 及びカ) については「他己評価」を実施する。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大を受け、第1学期に十分な時間が確保することが難しく、計画を下記のように変更した。変更の際、判断の軸としたのは、グランドデザインにおいて強調している「研究過程の充実」である。

〈変更後〉

第1学期 ア) 研究手法 イ) 研究テーマの設定（個人によっては研究課題の設定）

夏休み イ) に関する情報収集・整理 研究課題の設定

第2学期 イ) を受けて研究課題の検証 ウ) 研究計画書

冬休み ウ) に基づく検証、FW等の実施

第3学期 エ) 発表会 キ) 振り返りレポート

※「自己評価」「他己評価」については、当初の計画通り。

当初の計画では、本校において学年全員による課題研究発表会（ポスター発表形式）を実施し、外部より指導助言者を招聘し実施する予定であったが、上記の通り計画を変更し、各講座内で、中間発表会及び振り返りレポートの作成をすることで、生徒が探究活動全体を振り返る機会とした。

中間発表の意義を担当者会議でも事前に確認するとともに、各グループより代表生徒1名～2名を選出し、生徒たちにも事前に中間発表の意義を説明し、発表会当日の運営（司会等）にも当たらせた。教員の説明に頼らず、生徒自身が自分の言葉で取組の目的などを仲間に説明をすることで、主体的に動く機会の一つになったようである。実際の中間発表では、司会進行にも工夫が見られ、生徒のファシリテート力が発揮される場面もあった。

生徒の研究過程を充実させるには、初期段階において、研究手法を学ばせることに注力した。生徒に共通して持たせている『課題研究メソッド』（岡本尚也著、啓林館）をベースとしながら、①新聞記事の読み取り方 ②先行研究・事例の探し方 ③文献調査の方法 など共通のワークシートを用いて学ばせた。①については、分散登校の最中であり、少人数で実施することができ、自分で選んだ記事について書かれてある内容から関心をもったこと等を紹介する時間が十分にとれた。②においては、主に論文検索サイト（Google Scholar）を用いて、研究課題をたてる前に、先行研究・事例を学び、その内容を理解することを通して、自分の研究意義を確認する過程を重視させた。③については、本校図書館及び図書館司書と連

携を取り、文献検索の仕方、他の図書館から書籍を取り寄せる方法などを生徒たちは学び、自分の研究に活用する生徒が増えた。12月に実施した本事業に関わる意識調査からは、約8割の生徒が図書館を利用し課題研究に取り組んでいることが分かった。また図書館司書に「利用相談カード」を用いて相談する生徒も徐々に増えてきている。

生徒の主体的な課題設定については、個人の関心領域から探らせることとし、ブレインストーミングや選択した新聞記事の内容から生徒本人にテーマ及び研究課題の設定をさせた。その過程において、担当の教員が「伴走者」、つまりファシリテーター役になって、面談を繰り返し、生徒の探究活動のサポートに徹した。

(ウ) 授業担当者会議及び職員研修

今年度は第2学年の課題研究の授業に33名の教員が関わった。第2学年の生徒を13名～15名程度のグループ、合計28グループに分け展開することができた。また3～4グループを1つの講座とすることで、講座内の教員の連携も取れるようにした。例えば、保健体育、英語、化学の教員で講座を編成する形である。昨年度までは、特定の教科の教員に、指導が偏っていたことが大きな課題であったため、担当者会議を実施し、課題研究に対する共通認識をもち、指導の足並みを揃えていくことは必須であった。また同時に、課題研究が始まることで、従来までの授業に加え、放課後の部活動指導等もある中で、教員の負担増に懸念の声もあったため、担当者会議の日程や、実施の時期・方法については、慎重に見極めながら進める必要があった。会議では、單元ごとの内容だけではなく、教員が「伴走者」として果たす役割について繰り返し確認し、指導案を提示した。共通のワークシートを使うことで、生徒の探究の内容が、教員や仲間同士で共有しやすくなり、助言をする時の助けとなることを目指した。今年度担当者会議のスケジュールは次の通りである。この他、追加の連絡や、小さな変更等は職員朝礼等で連絡をするなどし、会議の開催回数が大幅に増えないようにした。また2月には外部講師を招聘し、職員研修を実施。課題研究の意義について、教員全体で確認する機会を設けた。

	日程	内容(概要)	備考
第1回職員研修	令和2年4月6日	本校における課題研究の意義	
担当者会議(1)	" 4月7日	研究手法①	
(2)	" 4月21日	研究手法②及び計画変更	
(3)	5月20日・21日	計画変更及び研究手法③	分散登校開始
(4)	6月10日(2回)	研究課題の設定に向けて	
(5)	6月24日、25日	研究手法④ 1学期の評価、夏休みに向けて	一斉登校開始
(6)	8月25日(2回)	研究課題の検証について	
(7)	10月14日(2回)	研究課題設定以降の流れについて	
(8)	11月25日(2回)	冬休み及び中間発表に向けて	
(9)	12月	2学期の評価について	
(10)	令和3年1月6日、7日	3学期の予定について	
(11)	1月13日(2回)	中間発表会に向けて	
第2回職員研修	2月10日	職員研修	外部講師

(エ) 生徒の変容 ～「気づきノート」から「研究ノート」へ～

探究活動を通じた生徒の変容を見ていくことは、本校における生徒の探究活動を深化させ

ていく上で欠かせない。昨年度より、生徒（現2年生）には一人一冊「気づきノート」を作成させた。日常生活の中で気がついたこと、疑問に思ったこと、時間を経て理解が深まったうえでさらに気がついたこと等を記入させ、自分の思考の過程を記録させる目的で始めた。講演会等における記録にも使用させ、見返す度に、自分の学びを振り返る記録になることを目指した。

今年度は、これまで「メモ」の機能を果たしてきた「気づきノート」を「研究ノート」へ深化させることに重点を置いた。研究ノートには①、学んだこと ②、気がついたこと ③、②をどのように活用してくかの3つの要素を入れることを原則としながら、それぞれ生徒がレイアウトを工夫し、探究活動を記録するノートとして機能を果たすと同時に、適宜、担当者が集め記載の内容を確認することで、生徒の変容を追跡する役割も果たした。単に書籍で読み取ったものを書き写すだけに留まっていた生徒も、自分にとっての「新情報」にポイントを絞って整理をするなど、特に2学期後半に入り工夫が見られた。また、毎時間「目的」を明記すること、たとえ短くても「文章」で書かせるといった教員の指導もあり、生徒は自分のすべきことを明確にし、時間の終わりに振り返り、また次の計画を立てるといった良いサイクルを身につけつつある。与えられたフォームの中で表現するのではなく、自ら工夫をし、自己の探究活動に役立てることができている生徒が増えてきている。

(オ) 次年度への引継ぎ

次年度への引き継ぎにあたり、生徒の成果物（今年度は「振り返りレポート」）の内容、生徒対象に実施した「意識調査」（11月、2月に実施）の結果等を検証し、生徒への説明やワークシートの文言等の修正を始めている。例えば、いわゆる「調べ学習」の域に留まっている生徒には、指導の過程において、どのような問いかけや仕掛けをしておくか、生徒を調べ学習の域から一歩踏み出せることに繋げられたのかについて検証をし、次年度の担当者へと具体的な策とともに引き継いでいきたい。

また授業担当者間の引き継ぎも、大きな課題である。教科を超えた取組が始められたことは大きな成果であるが、次年度以降、担当者が替わることは十分想定される。その中で、人員の変更にも耐えうる引き継ぎの方法を検討していく必要性を強く感じている。

ウ 実践の検証

昨年度掲げた検証事項を踏まえ、実際に生徒全員に「課題研究」に取り組ませることができたのは成果だと言える。11月に実施した生徒対象の意識調査からは、8割を超える生徒が研究テーマに対する関心の高まり、新しいことへ挑戦しようとする気持ちの高まりも見られ、課題発見から課題解決のプロセスを充実させようとする姿勢が感じられた。同時に、多くの情報の中から自分にとって必要な情報を抽出することの難しさや、計画を立てて自ら動いていく難しさを感じたようである。

当初は、生徒が自走できるまで「伴走する」という形に、戸惑う教員もおり、生徒が目に見える形で活動していないと、生徒が何もしていないという捉え方をしてしまうといった声も聞こえた。一人の教員が、平均13名～15名程度を担当するのは決して容易なことではないが、次第に、生徒一人一人に合った探究の程度が見えてくると、助言もし易くなってきたとの声も聞こえてきた。生徒が考えを整理する段階において、どのような問いかけをすることが、伴走者として適切か、教員もこれまでとは異なる力が求められていることが明確になった。そのような中、生徒同士が進捗度状況を報告し合う機会を定期的にもった。生徒たちはそれぞれのテーマを掲げているが、異なるテーマを扱う仲間の報告について、質問をしたり、時には研究課題が深化するような鋭い問いかけをするなど、生徒同士が「協働」しながら、探究を進めていると感じる場面も多々見られた。このような生徒の変化は、彼らの研究ノートの記述にも如実に現れ、研究ノート

を整理することで、探究が動き出したといった生徒も多数現れた。文章での記述については、言語化することの大切さを感じている一方で、どのように表現したらよいか、戸惑っている生徒もいた。生徒同士、ノートを見せ合うなど互いに刺激し合い、工夫していたようだが、教員がどのような指導の手順を踏めば、生徒たちの記録が、生徒自身の学びの充実につながるかについては、生徒の声も聞きながら、検討を重ねていきたい。

担当者会議は校内の体制を作っていく上で、一定の効果があつたと考える。指導案と共通のワークシートで、ある一定の進捗を揃えることができ、日を追うごとに、講座内（3グループが基本）の教員同士が、教科・科目の枠を超えて、打ち合わせをする場面も数多く見られるようになってきた。互いに生徒の様子を報告し合うなど、指導の詳細について事前に話合う姿が校内で頻繁に見られた。すると、生徒も同じ講座の他の教員に助言を求めたり、自然科学分野の進め方について、理科教員に相談に行くなど、講座内外の動きが活発になってきた。これは課題研究の時間内外を問わず、教員間の連携がとれてきたことが背景にあると考える。また、運営側にも利点が多くあつた。授業担当者から実際の展開後にフィードバックがあり、すぐに修正できるものについては対応するようにした。要望があつたものについては、可能な限り対応したが、初年度こそ本校の課題研究における目標である「過程の重視」に軸を置き、当初掲げた検証のポイントを念頭においた運営を心掛けた。生徒が探究の過程で「行ったり来たり」することに寄り添いつつも、伴走者として教員がどこまで生徒の力を引き出せるか、次年度以降に向けて、大きな課題である。

最後に、課題研究は研究課題の設定が鍵を握っていることを改めて実感している。課題研究で生徒が扱うものが、生徒にとって「別世界」のものにならないテーマにするために、日頃の学習内容（入試に向けたものも含む）を導入に用いることの有効性について、運営指導委員よりご助言を頂いた（運営指導委員会、令和3年2月5日）。このことを踏まえ、あくまで生徒主体のテーマ設定ではあるが、設定のヒントとして、またファシリテーター役の助言の中に、本当の意味で「主体的な」研究課題の設定ができるような支援体制を築いていく必要を感じている。また、「伴走者」という言葉で、共通認識を図ってきたが、例えば「ペースメーカー」の役割といった、「伴走」の中身について、研修や担当者会議を通じて、共通認識を図っていきたい。

（以下、授業担当者からの感想一部抜粋）

○伴走者として

・「伴走者」として的確なアドバイスができたかと言えば、自信はありません。自分で研究課題を見つけることや、課題解決に向けて自分なりに進めていく過程が大事だと思いつつも、課題をうまく見つけられない生徒にはつい誘導してしまうような助言をしてしまったこともあつたと思います。調べればわかることから一歩進んだ課題を見つけるということが、私自身も含めとても難しく、うまく導けなかったことが反省点です。（国語科）

・本年度、課題研究の担当となりかなりの不安がありました。しかしスタートの時点で、ある程度研究テーマが絞り込まれている生徒が多いように感じました。また、資料や論文等が豊富にある内容が多く、先生方との情報交換でも、かなり熱心に研究している生徒が多い班であったように思います。ですから、伴走者というよりは研究している生徒たちの傍観者であったように感じています。（数学科）

・私自身が課題研究の意図や趣旨を理解することから始め、教育企画部から配布された資料や共通のテキストを読み返しました。そして、生徒には最小限の言葉で、説明中心にならぬよう、毎時間、自分に言い聞かせていました。けれど、研究課題が見つからず悩んでいる生徒に的確なアドバイスの言葉をかけることが出来ず、ついつい時間を費やし、話し込んでしまう時もあり反省しています。（芸術科）

・自分の課題研究についての理解が浅く、なかなか生徒にうまく“伝える”ことができませんでした。そのため、どうしても補足や例をあげすぎてしまい、本来の課題研究から離れたことをしていたように感じます。後半は、少しですが、情報やヒントを“小出しにする”ことを意識し、伴走することができていたかなと思います。(保健体育科)

○生徒の変容について

・2学期以降は研究課題が見つかり、仮説をたてながら、進めていく生徒が多くなってきた。(芸術科)

・グループ内で交流をすることで、仲間の取り組みや方法を知り、自分の取り組みの参考にできたという意見もありました。本人に許可を得て、うまく進んでいる生徒の取り組みをグループ内で紹介しましたが、それも前向きに研究を進めていく参考になったと感じています。(家庭科)

・興味関心のあることが大きなテーマである生徒が多く、ある程度絞った研究課題を設定できるかどうか、ポイントだったように感じました。当初からある程度絞れていた生徒は、研究を自主的に進め、面談では今困っていること、行き詰まっていることを自分で把握し質問してくれました。自分で調べているだけではわからないことも、生徒同士の交流を通して、多角的な視点を身につけて、自分の研究に活かす姿勢が見られました。テーマを絞ることがうまくできなかった生徒も、自分なりに調べたり、テーマを変更したりしながら、自分自身と向き合い、課題研究に取り組んでいたと思います。(国語科)

・中間発表の意義を理解して、取り組んでいる生徒が多く、展望が具体的になっている様子を見て、課題研究のための課題研究ではなく、テーマを「自分事」として、捉えている生徒が多いと感じた。(英語科)

○担当者会議等運営について

・担当者会議があったので、大きな齟齬なく、各担当者が指導にあたれたと思う。(国語科)

・共通のワークシートや指導案があったので、それに則って進めることができた。(数学科)

・見通しを立てる力をみにつけさせるためには、中長期のスケジュールを生徒に示しておくことが必要。今年度は休校措置もあったので、致し方のないところもあるが、本校教員全員が一度は課題研究の指導を経験するまでは、さらに緻密な計画が必要。(英語科)



(写真は、定期的にも実施した進捗状況報告会の様子)